創世ホール通信No. 308

催し案内＋文化ジャーナル
2020年９月１日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

創世ホール名画鑑賞会vol.32
『新聞記者』

日時：令和２年９月27日(日)
　　①午前10時30分／②午後２時
会場：3階　多目的ホール

前売り券の購入について、ただいま図書館カウンターでの販売は停止しております。カウンター及び電話での予約受付のみの取り扱い(前売り券の代金は開催日当日に、受付にてお支払いいただきます)となります。ご了承ください。
入場料：大学生・一般　前売1,000円(当日1,300円
　　小・中・高　当日のみ1,000円
　　シニア(60歳以上)当日のみ1,000円

上映作品：『新聞記者』(2019年・日本・113分)
原案＝望月衣塑子『新聞記者』(角川新書刊)
　　出演＝シム・ウンギョン　松坂桃李　他
　　監督＝藤井道人
主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会
　　(☎088-698-1100)

■東都新聞の若手記者・吉岡(シム・ウンギョン)の元に届いた一通のFAX。そこには大学新設計画の極秘情報が匿名で告発されていた。■吉岡が独自取材を開始する一方で、「国民に尽くす」という使命感に燃える内閣情報調査室の官僚・杉原(松坂桃李)に、現政権に不都合なニュースをコントロールせよと命が下る。■真相究明にもがく新聞記者と、使命と任務の間で葛藤するエリート官僚。二人の正義が対峙するとき、衝撃の事実が明らかになる。■原案は望月衣塑子氏が自身の記者としての歩みを綴った『新聞記者』■第43回日本アカデミー賞に輝いた社会派エンタテインメント！権力とメディアの裏側を描いた話題作です。多数、ご参集下さい。

北島トラディショナル・ナイトvol.24
ケルト・北欧音楽への旅
5分間の魔法

日時：令和２年10月17日(土)
　　午後７時開演(午後９時終演予定)
会場：3階　多目的ホール
出演：hatao＆nami(ハタオ＆ナミ)
　　畑山智明　アイリッシュフルート、パイプ、
　　ティンホイッスル　ほか
　　上原奈未　ハープ、ピアノ、ほか

主催：北島トラディショナル・ナイト実行委員会
　　(☎088-698-1100)

前売り券の購入について、ただいま図書館カウンターでの販売は停止しております。カウンター及び電話での予約受付のみの取り扱い(前売り券の代金は開催日当日に、受付にてお支払いいただきます)となります。ご了承ください。
入場料：大学生・一般　前売2,000円(当日2,500円)
　　小・中・高　前売1,500円(当日2,000円)

■ケルト、北欧音楽の分野で長く活動してきた、ケルト北欧の笛奏者hataoとハープ、ピアノ奏者のnamiが2011年に結成した本格派デュオ。■ティンホイッスルやアイリッシュフルートなどケルト音楽に欠かせない定番楽器、北欧の地方に伝わる珍しい笛やスコットランドの伝統楽器・バグパイプなどユニークな楽器を駆使して、彩り豊かに奏でます■あふれる異国情緒、けれどどこか懐かしい…アイルランド～ケルト文化園の伝承曲の魅力をたっぷり堪能できるひとときをお楽しみください！

人形劇団べんべろべえ公演

日時：令和２年10月２２日(木)　午前１１時
会場：２階　ハイビジョンシアター　入場無料
対象：就学前の子ども　赤ちゃんも大歓迎
演目：未定（※演目は次号でお知らせします。）
問合せ：人形劇団べんべろべえ
(代表：兵頭☎088-698-6652)

※創世ホールに来場される方へ※

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。
▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を１席空けてお座りいただくようにしております)
■なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

文化ジャーナル300号達成記念★第19号復刻掲載

■6月号から過去の「文化ジャーナル」を復刻掲載しています。今回は第19号＝一九九六年八月号。活字書体史研究家・小宮山博史さんからのお誘いで愛媛県宇和町（＝現西予市）の米博物館内活版資料室オープン記念行事に参加した際のことを書いたものです。当該紙を宇和町長さん宛てにお送りしたところ、後日直筆で丁重なお礼状を頂戴し恐縮したことをよく覚えています。小宮山さんは、最近『明朝体活字　その起源と形成』（グラフィック社、二〇年九月二十五日初版第一刷、四四〇頁、本体四二〇〇円）を刊行されました。研究者必読です！（小西昌幸）★

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

愛媛県宇和町の活版資料室オープン行事に参加して

■6月15日、愛媛県宇和町というところから私宛てに公文書が届いた。標題は「米博物館活版資料室オープン行事について」。内容は6月29日に行なわれるその催しへの参加案内だった。一瞬考え込んだが、すぐピンときて横浜の書体デザイナー・小宮山博史さん（佐藤タイポグラフィ研究所代表）に電話をかけた。「創世ホール通信」では16号から小宮山さんのインタビューを掲載しているが、宇和町からの案内は、小宮山さんの進言で私宛てに送られたものだった。小宮山さんは、活版資料室の資料収集や展示レイアウトにたずさわってこられたのだ。小宮山さんは、「府川君も行くと思うからあなたも来なさいよ」といった。これは面白いことになりそうだ。よし、行こう。私は所長と教育長に相談した。普通旅費でＪＲの片道分だけを負担してもらい後は自己負担で出張させてもらうことになった。

■6月29日朝7時過ぎのＪＲで徳島を出発し、5時間半かかって卯之町（うのまち）という駅に着いた。宇和町役場は、その駅のすぐそばにある。活版資料室が開設された米博物館は、駅から歩いて10分程のところにあると聞いていたので、改札を出たところで高校生に場所を聞いていると、後ろから声をかけられた。小宮山さんだった。小宮山さんたちも松山から同じ列車に乗っていたのだ。私の古い知人である府川充男氏（印刷史研究家、装丁家、阿佐ヶ谷美術専門学校講師）、日下潤一氏（晶文社の書籍や『芸術新潮』誌の装丁を担当）もいる。彼等は印刷史研究会の同人である。もしかしたら寝過ごして飛行機に遅れるかもしれないと懸念されていた府川氏は無事乗れたものの、前田成明さん（写植オペレーター。スタジオＤ主宰）が間に合わなかったということだった。『芸術新潮』主任編集員・三好雅司さんもいる。みんなでタクシー２台に分乗し米博物館へ向かった。

■宇和町は、古い木造校舎などを利用した博物館や記念館を多く作り、それを町の個性にしている非常にユニークな自治体である。今回の「活版資料室」は、木造校舎を利用した宇和町立米博物館の１室に開設された。毎日新聞社で使われた活版印刷の機械が寄贈され、同社と日本タイポグラフィ協会の全面協力で貴重な機械や資料の数々が展示され、今回のオープンに至った。教室１つが資料室にあてられている。小宮山さんは日本タイポグラフィ協会の依頼を受けて活版資料室開設の準備にあたり、何度も宇和町に足を運ばれたのだ。

■午後１時にテープカット。続いて資料室の展示物の解説が行なわれた。「毎日新聞」の現在使われている文字書体を作った小塚昌彦氏（毎日新聞社退職後、写植メーカー・モリサワに７年勤務し、現在アドビシステムズで書体デザイン）が展示物について説明をしていった。貴重な活版資料の展示室は全国でもここだけなのだそうだ。宣伝次第で十分観光資源になると思う。私には心踊るものがあった。

■２時から別室に関係者約50名が集まり記念式と交流会が開かれた。私のような者にまで席が設けられており恐縮した（席はくじで決められ、私が引いたのは１。右隣りが町長、左隣りが収入役、斜め前が町議会議長、正面に画家の三輪田俊助氏という恐ろしい席だった）。

■町長あいさつが行なわれた。「エポックを画す資料室の開館を喜んでいる。これを大切にしてさらに充実し、天下に誇るものにしたい」。その後、町長から感謝状が毎日新聞社と日本タイポグラフィ協会に手渡された。毎日新聞東京本社・多田俊雄制作部長と、小塚氏がそれぞれ代表して受け取った。

■毎日新聞の多田制作部長があいさつした。「先ほど感謝状をいただいたが、私はむしろ皆さんに感謝状を進呈したい。この活版資料室開設の話を聞いて、私は体が震えた。毎日新聞社が最後の活字版を刷り終えたとき、私たちはなんとかその機材を残したいと願ったが、会社で保存できなかった。それが７年ぶりに展示された。ぜひこのことを役員に報告したい。本当にありがとうございました」。真情あふれることばだった。自分たちが長年愛用してきた機材が遠く離れた愛媛の地で、末長く保管されるのだ。感慨深かったに違いない。

■次に小宮山さんが「活版資料室設置の狙い」について話した。「町長はじめ皆さんのおかげをもって、タイポグラフィ協会の倉庫に眠っていた資料に日の目を当てることができた。この話が持ち込まれて、町長が『うちでやろうじゃないか』といって手を挙げてくれた。このつながりがなければ、私は宇和町にくることはなかった。できれば将来オフセットの資料室なども増やしてタイポグラフィ博物館に発展させていただけるとうれしい」。

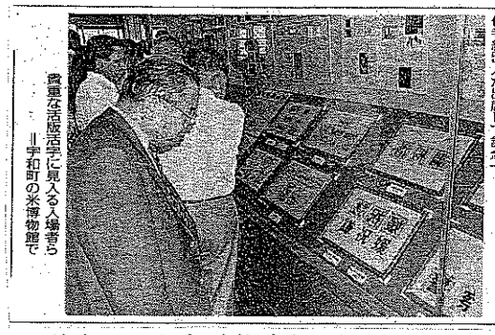
■その後、薬師神親彦氏（宇和島市出身のデザイナーで資料室開設の橋渡しをした中心人物の１人。東京に事務所をもち宇和島と東京を往復。）の音頭で乾杯。出席者約50人が宇和町の文化担当室の課長以下職員の方の手作りの料理を食べながら交流会をもった。そして出席者全員が１人ずつ立って自己紹介をした。私は、「すばらしい資料室設置に心から敬意を表したい。徳島に帰ったら宣伝したいと思う。本当におめでとうございました」という趣旨のあいさつをした。

■午後３時半頃、前田成明さんも到着。交流会が終わって博物館前で記念撮影をしたあと、夕方、ＪＲで宇和島市へ移動した。

■その夜、小塚氏、薬師神氏、印刷史研究会の４人（小宮山、府川、日下、前田の各氏）、三好氏、ケース・オーエンス氏（オランダ人。庭師で前衛彫刻も手がける）、岡崎哲氏（宇和町で牧場経営。資料室開設のもう１人の橋渡し役）、そして私の10人で宇和島市内の店でビールやウーロン茶で乾杯した。

■翌日、私は開明学校という文化施設を見学した。ここには、古い教科書資料が6000点も収集・展示されている。それこそ江戸時代の木版刷りの教科書から明治・大正・昭和の教科書まで実にきめ細かく展示されている。古い印刷物に関心のある者にとっては誠に興味深い、貴重なものだった。宇和町は実に面白い町だ。私は友人・知人にいっぱい宣伝しようと思いながら徳島に帰って来たのだった。

後記●「文化ジャーナル」では３号連続で小宮山博史さんのインタビューをお届けしていますが、今回は、その小宮山さん関連で訪問した宇和町のレポートをお届けすることにしました。◆私は宇和町から戻ってすぐに紀田順一郎さんと片塩二朗さんと板東孝明さん宛てに、資料を送りました。皆さん非常に関心をもたれたようでした。本県の鳴門市ドイツ館所蔵の印刷物についてもいえることですが、それらの貴重な印刷資料には、もっとスポットが当たってしかるべきだと思います。（1996・7・31 小西昌幸）



貴重な活版活字に見入る入場者ら＝宇和町の米博物館で

活版機材110点 資料室オープン

宇和町の米博物館

本社の鉛活字最後の組版も

活版関連機材約110点を展示し、近代活版技術の歩みを伝える「活版資料室」が宇和町卯之町の米博物館に29日オープン。宇都宮豪一町長や、展示品を使用していた毎日新聞社などの関係者約50人が出席して記念式が行われた。

宇都宮町長が「貴重な活版機材を大切に保存したい」とあいさつ。毎日新聞東京本社の多田俊雄制作部長は「歴史ある小学校を利用した博物館に歴史ある活版機材を展示してもらい、ありがたい」と感謝の言葉を述べた。毎日新聞社から機材提供を受けて町に寄贈した日本タイポグラフィ協会（東京）と毎日新聞社に感謝状が贈られた。

展示品のうち引点は毎日新聞社で使われていたもので、鉛活字最後の活版となった1989年12月1日付一群馬版」の大組想版や鉛の活字を作る「トムソン活字鋳造機」などがあり、ほかにイギリス製インド会社印刷所で使われていた活字なども展示されている。

▲「毎日新聞（愛媛版）」1996・6・30

▲展示物の説明をする小塚氏

▲毎日新聞多田部長

▲小宮山博史氏

▲米博物館前で記念撮影

▲その他記念写真の数々

1996年8月号